江戸時代の銭湯

越谷市立大相模中学校　加藤幸一

〔風呂と湯の違い〕

風呂とは　蒸風呂、湯とは　湯浴みのことをさす

お風呂というと　今では必ず浴槽を思いうかべ　湯と同一視しているが　実は　本来別々のものである。「お風呂にはいる」の『風呂』とは　蒸風呂のこと。釜に湯を沸かし　密閉された浴室に蒸気を送り込む。入浴者は蒸気にあたり　皮膚をたたいたり　こすったりして垢を落とす。そのあと　湯あるいは水で身体を洗うのである。「湯につかる」の『湯』とは　湯浴のこと。湯を入れた浴槽につかり身体を温め　流し場で身体を洗うことである。

〔銭湯の始まり〕

銭湯の始まりは、家康の関東入国の翌年に　銭瓶橋のほとりで始まる。まもなく湯女風呂（今でいう特殊浴場にあたる）として栄えた。

江戸の銭湯は　徳川家康の関東入国（江戸入府、江戸打入りともいう）の翌年、多くの男たちを集め　江戸の町づくり、大土木工事がはじまったばかりの天正19年（1591年）の夏　伊勢与市という男が銭瓶橋のほとりに銭湯風呂を立て、永楽銭一文で人々を入浴させたことに始まるとされている。まもなく銭湯に湯女を置き　あらくれ男たちの体を洗い　あるいは　男の求めに応じていかがわしいこともする湯女風呂ができて　ますますさかんになっていった。大名をはじめとする武士や　お金持ちの商人が遊ぶ金のかかる吉原の遊郭（日本橋の北東にある葭のしげる原っぱに元和3年1617年にできる）に対して　この頃の銭湯は　安あがりの男性の遊び場でもあったのである。明暦元年（1655年）には　江戸中に湯女風呂が200軒余あったという。湯女風呂は風紀上の理由からたびたび取締りを受けてきたが　明暦3年（1657年）の「明暦の大火」以降は　いっさい禁止され　以後江戸の銭湯は保健衛生のための公衆浴場として存続するのである。

〔江戸時代の銭湯〕

町内に1・2軒はあった銭湯は　町内の人々の社交場としての役割を果たした。

江戸時代に盛えた銭湯（「洗湯」とも書く）は　銭を取って入浴させる今の公衆浴場にあたり　風呂屋・湯屋ともいう。各町内に少なくとも1軒はあり、大人（おとな）六文、小人（子供）は四文の安い料金（寛政6年1794年より大人十文、小人六文となる）で　明け六つ（午前6時頃）から始まり　暮れ六つ（午後6時頃）まで営業していた。火事を恐れること、薪が高価なこと、水が不自由なことから　武家屋敷以外は大町人の家でも浴室を設けない。宿屋でも客を銭湯へ行かせている。大町人の女房、娘も銭湯に出かけることを恥としない。そして江戸の人々は毎日入浴する習慣があり、朝飯前に　一風呂あびる若衆や　のんびりと湯につかる年寄たちでにぎわい　町内の人々の社交場としての役割を果たしていた。

なお、銭湯には「入込み湯」といって男女混浴や　一軒の銭湯で男湯の日、女湯の日をそれぞれ定めているものや　男湯だけのもの、女湯だけのものがあった。男湯・女湯が　今日のように　左右に並ぶようになったのは　寛政3年（1791年）、寛政の改革の一環として　幕府が男女混浴を禁止してからである。

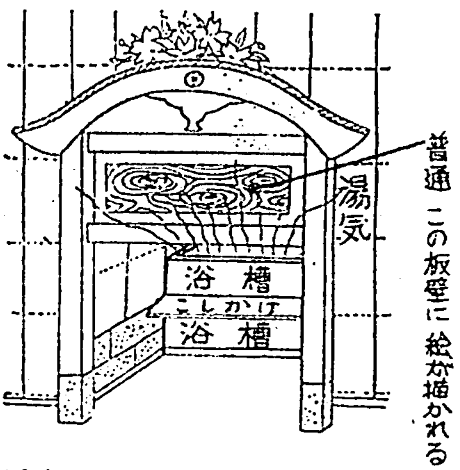
銭湯内の様子

男湯・女湯のそれぞれの奥に見られるのが「石榴口」である。

〔銭湯の石榴口〕

江戸時代の銭湯は　石榴口から　かがみ込んで中にはいり　湯気にあたったり　湯ぶねにはいり、石榴口から出てきて洗い場で体を洗った。

石榴口



当時の銭湯は「風呂」と「湯」とをうまく兼ね合わせたもので　浴槽の湯気（蒸気）が発散しないように浴槽のある場所の外側を板でかこみ　そこに入口がつけられている。この入口を石榴口と呼ばれる。人はこの石榴口から　かがみこんで入り　頭を持ち上げ　一・二歩進んだところに浴槽がある。石榴口の内部では　湯浴みと蒸風呂の両方の効果を発揮したのである。石榴口との呼び名は　出入りするのに「屈入る」を「鏡要る」にかけ　鏡を磨くのに石榴の酸を使ったところからきているといわれる。この石榴口によって中はうす暗くなり　浴槽にうっかり入ると先客の頭とか肩に当たったりする。そこで浴槽に入るとき「ごめん」と声をかけるとか　あるいは先客が咳払いをして知らせるなどした。暗いので赤ん坊の大便など浮いていても目につかず　浴槽内の湯は実に不衛生きわまりなかった。

なお　石榴口の手前は洗い場となっていて身体を洗うところで　また　石榴口の上部の板壁には　さまざまな絵や彫り物があったりして客の目を楽しませていた。

〔明治以降の銭湯〕

明治にはいって明治12年（1879年）に　この石榴口は警視庁の命令によって強制的に取り払われた。石榴口がなくなって浴槽が明るくなったのはいいが　湯気がこもらないので　永年慣れていた老人たちにとっては　頭が冷えてしかたがない。そこで湯をしめした手拭いを頭の上に置いた。頭に手拭いを置く習慣は　石榴口が取り払われてからのことである。

[illegible]

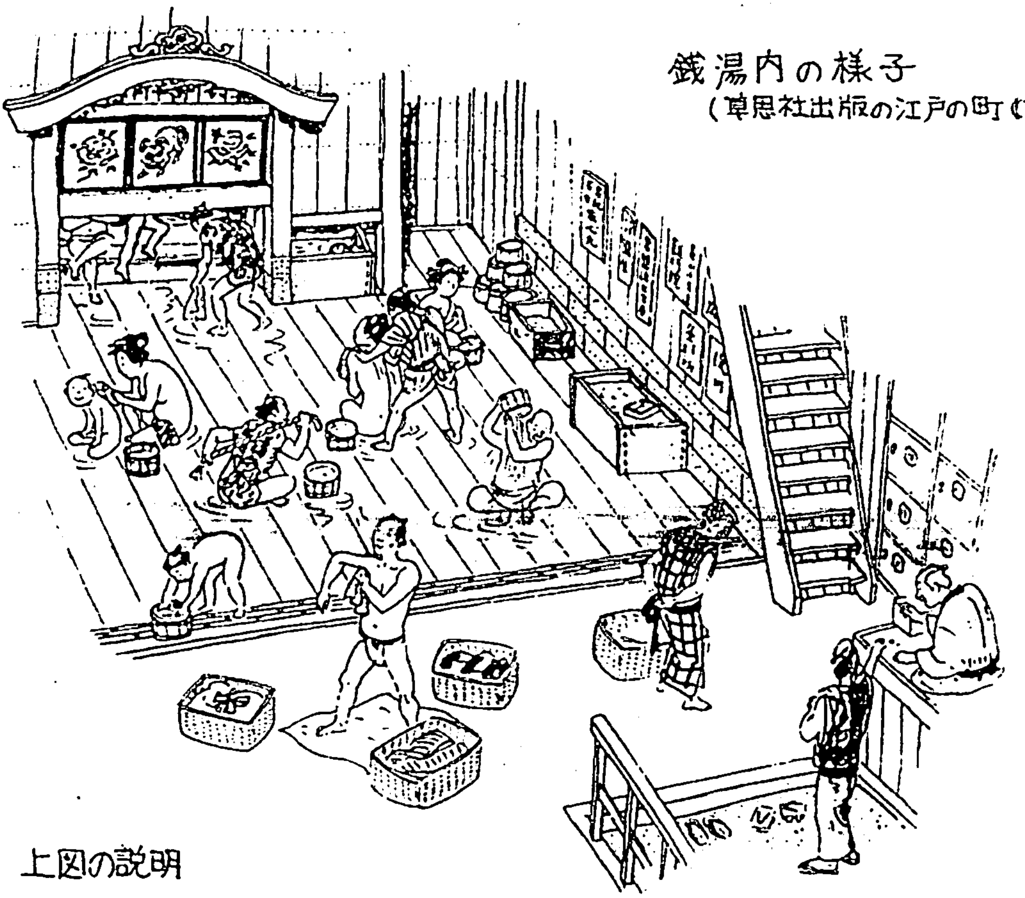
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

また石榴口の板壁に描かれていた絵が消えてしまったのも淋しいことである。殺風景になった銭湯の浴室をなんとかしようと 大正の初め 東京神田のキカイ湯という銭湯が浴室内の周囲に絵を描かせたところ、大変な評判となり 他の銭湯でも真似するようになったという。今日の銭湯で見られる風景画は この石榴口の板壁画の名残りといえる。



銭湯内の様子
(草思社出版の江戸の町(下)より)

上図の説明

- 銭湯の入口では 番台に銭を支払ってはいろうとしている町人がいる。
- 着替え場では 帯を解いて竹製のかごに衣類を入れようとしている町人と湯からあがって体を手拭でふいている町人がいる。
- 洗い場では 木製の手桶を使って体を湯で流しあがろうとしている年配の町人、婦人の背中を流している三助(さんすけ)と呼ばれる銭湯の使用人や 入墨(いれずみ)した若い町人が手拭をねじって背中を洗ったり、母が子の背中を流している様子などがみられる。
- 石榴口では かがみこんで中にはいろうとしている入墨の町人がいる。
- 石榴口の中では 腰掛にすわって蒸気にあたっている者や 腰掛に足をかけて、湯ぶねにはいろうとしている者がみられる。
- 着替え場にみられる階段は 一風呂あびた男の客が お茶を飲みながら碁や将棋に興じたりして気楽に休息するための二階座敷に通じる階段である。

(参考にした主な本)・江戸学事典(弘文堂)・'79・7月号臨時増刊「日本史おもしろ全科」(聖文社)
・江戸の町(下)(草思社)